

王
丹 / 著

现代日本语『态』研究
以『可能态』为中心

ヴォイス可能

上海人民出版社

上海三联书店

现代日本新「志」研究
以「司康志」为中心

陈世华 著

上海三联书店出版

图书在版编目(CIP)数据

现代日本语“态”研究:以“可能态”为中心/王丹
著.—上海:上海人民出版社,2015
ISBN 978-7-208-12777-7

I. ①现… II. ①王… III. ①日语—表达(语言学)
—研究 IV. ①H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2015)第 021498 号

责任编辑 鲍 静

封面设计 范昊如

现代日本语“态”研究

——以“可能态”为中心

王 丹 著

世 纪 出 版 集 团

上海人民出版社出版

(200001 上海福建中路 193 号 www.ewen.co)

世纪出版集团发行中心发行 江苏凤凰数码印务有限公司印刷

开本 635×965 1/16 印张 16.5 插页 3 字数 167,000

2015 年 4 月第 1 版 2015 年 4 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-208-12777-7/H·80

定价 48.00 元

王丹／著

现代日本语『态』研究
以『可能态』为中心

ヴォイス可能

本书获得卡西欧出版资助

上海人民出版社

現代日本語の
ヴォイス研究
可能を中心に

序

王丹是我的学生，从 2005 年跟随我攻读硕士学位，2008 年毕业后又跟随我继续攻读博士学位，一直在研究现代日本语的语态（ヴォイス）和可能态的问题。自 2011 年博士毕业后，王丹在博士论文的基础上，又进行了修改、整理和进一步深入研究，写成了这本著作。

我对自己的每一届研究生说，学位论文的研究课题必须是对日语的特征进行的研究，同时也必须对日语教育有一定的实际参考价值。王丹的这本研究著作从研究课题的选定到最终完成预期的研究目标，每一步都实现了我的期待。

该著作以日语的可能表达方式研究对象，对现代日语的语态（ヴォイス）中出现的诸多问题进行了实证性的考察研究。对日语的可能表达方式进行了重新定义，考察了其语义特征和从句形式，并对可能表达方式的语义类型及其派生关系进行了重新分类。在

此基础上，论文对可能表达方式与意志的相关关系进行了论证，对日语教学中常见的语法难题“れる・られる”与“ことができる”的表达方式进行了详细比较。对自动词及其与他动词的可能表达进行了考察，并通过与中国汉语的比较，详细论证了日语自动词无标识可能表达方式的具体内容。以上研究内容在博士论文答辩时，得到了答辩委员会各位老师的充分肯定，称其为是针对日语可能表达方式所进行的一次最全面并有相当实用价值的研究，并建议尽快分篇投稿发表各项内容。

王丹为人执着、诚朴，做学问也是如此。诚如她自己在博士论文答辩时所说的：检阅了所有的自己所能收集到的先行研究资料，尽可能地吸收前人的研究成果，不敢妄言创新理论，但尽力补缺，以求实效，所有论证必以实例和数据为先，不敢妄下结论。我想，这一点通过她的论著是可以证实的。

值著作即将出版之际，我由衷地感到高兴。期待王丹在日语教学与科研中做出更大的成绩。

是为序。

上海外国语大学教授、博士生导师 皮细庚

2015年1月26日于上海

謝 辞

本研究を遂行し、本にまとめるにあたって、実に多くの方にお世話になりました。この場を借りて、感謝の意を述べさせていただきますと思います。

まず、テーマの選定から文章に仕上げるまでの全過程において、多大なお時間と労力を費やし、熱心にご指導くださった皮細庚先生に、厚く御礼を申し上げます。執筆を始めるにあたって、先生にいただいた「中国の日本語教育と研究に役立つような有意義な論文を」という励ましの言葉が今にも耳に響いています。

そして、文章の作成にあたり、許慈恵先生、呉大綱先生、呉侃先生、陸留弟先生、毛文偉先生よりたいへん貴重なご意見とご助言をいただき、ここにて深く感謝いたします。

華東政法大学外国語学院の皆様、日本語科の同僚たちに、日頃お世話になりました。心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

ます。

最後に、常に励ましてくれ、支えてくれた親愛なる母、父、
夫、可愛い息子に心より感謝の意を表したいと思います。

摘 要

现代日本语中的“态”(Voice)是指谓语动词所表示的动作涉及的诸如施事者、对象之类的动作参与者和句子成分之间的关系。相当于汉语中的“语态”。比较典型的“态”有“主动态”、“被动态”、“可能态”、“使役态”等等。其中,现代日语的可能表达方式非常复杂,日语学习者很难正确掌握。由于日语教科书中仅对可能表达方式的具体条项分别进行解说,没有对可能的语义特征和分类等进行深入分析,学习者对日语的可能表达方式没有一个全面的把握,或由于母语干涉等原因,经常出现误用。

本研究分八章展开论述。首先在第一章(序章)中,主要陈述本研究的目的是拟解决的具体课题,规定本研究的对象,对采用的研究方法、本研究的构成等进行说明。

在第二章(现代日语可能表达方式的先行研究)中,分别对有关日语可能表达方式语义特征的先行研究、有关「れる・られる」

与「ことができる」的先行研究、有关自动词的可能的先行研究进行概述和总结，为本研究的展开奠定基础。

在第三章（可能的本质与定义）中，首先明确本研究的立场观点，将可能表达方式定义为“事物的实现可能”。其次，通过对日语的可能表达方式的本质进行分析，归纳出可能的本质必须具备三个要素——动作主的意图、条件限制和状态变化。最后，本章利用“可能本质三要素”这一结论，分别对“认识可能”、情态可能和一般可能表达方式进行考察，探究三者之间区别。通过考察，发现“认识可能”和情态可能并不满足可能本质三要素，与一般可能表达方式存在本质上的不同。为了与一般可能表达方式进行区分，本研究将“认识可能”和情态可能命名为“可能性表达方式”。通过对例句的分析发现，“得る”这一形式根据前后文和用法的不同，既可以构成可能性表达方式，也可以构成可能表达方式。

在第四章（可能表达方式的语义类型与形态）中，参考先行研究，尝试对日语的可能表达方式进行分类。分别从语义类型、形态方面进行分类，力求对现代日语的可能表达方式进行全面把握。

首先，在语义类型方面，将可能分为“潜在可能”和“实现可能”。如下图 0-1 所示，潜在可能又可根据可能、不可能的原因不同，分为“能力可能”和“状况可能”。能力可能可分为动作主能力可能、动作对象属性可能和价值可能。状况可能可分为内在状况可能和外在状况可能。

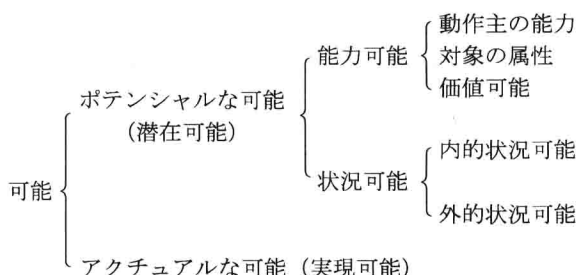


图 0-1 可能表达方式的分类

其中，潜在可能是超时间的，强调状态。实现可能具有时间性，表示一次性动作的实现、非实现，强调动作。实现可能采用过去形态，焦点在于事项的实现，因此其与潜在可能的语义特征不同。本研究通过对实现可能进行分析考察，发现其具有以下特征：

实现可能可以表示毫无预想的偶发性行为的实现。实现可能表示一次性动作的实现。其具有“此事项对动作主体而言是理想的、且是难得的”的正面语义特征。

其次，本章通过形态对可能表达方式进行分类。从形态上可将可能表达方式分为有标识可能表达方式和无标识可能表达方式。

最后，通过分析得出结论，可能表达方式的语义类型与形态并非构成一一对应的关系。

在第五章（「れる・られる」与「ことができる」）中，分析可能表达方式中最重要的两个表现形式—「れる・られる」与「ことができる」的区别。这两种表现形式无论是从语义上还是从使用方法上，都很类似，很多时候可以互换，因此，外国学习者经常出错。本章将分别从语义、文体、句法三方面，深层地探究两者的区别。

首先，本章对「れる・られる」和「ことができる」的成立、发展轨迹进行考察。在此基础上，分别从语义、文体、句法方面，分析考察两者的区别。本研究通过考察发现，两者在语义上，主要有以下区别。「れる・られる」可以表示价值可能、动作对象属性可能这类被动可能，而「ことができる」无法表示被动可能。「れる・られる」表示内在能力的可能，而「ことができる」表示外在条件的可能。表示感情的可能时，只能用「れる・られる」。在文体方面，两者主要有以下区别，「ことができる」多用于书面语，特别是在科技论文、法律文书、评论文、政治文章等文章中广泛使用。而「れる・られる」多用于小说及会话等口语性较强的文体。另外，「ことができる」音节数更多，难以用于复句中。由于同样的原因，在某事成功实现后，马上表达发自内心的感情的句子中，也难以使用「ことができる」。在句法方面，「ことができる」的命题部分“すること”与“できる”分别可以作为各自独立的表现形式来分析，两者之间可以插入各种各样的语句，较之「れる・られる」，其对前项的制约条件也更宽松。

在第六章（自动词的可能）中，对自动词的可能进行研究。外国人学习日语时，经常会出现在原本只用自动词表示可能的地方多添上可能标识「れる・られる」，构成病句。到底什么情况下可以添加可能标识「れる・られる」；什么情况下不能添加「れる・られる」，只用无标识的自动词就可以表达可能的语义呢？本章对此展开研究分析，找出其规律。

首先，本章从意志性方面对自动词的可能进行探讨。本研究导入意志性和主体性等因素，将自动词分为有情有意志、有情弱意

志、无情无意志三个类型进行考察，得出以下结论。

类型1有情有意志自动词可用可能标识来表达可能的语义。类型2有情弱意志自动词之后不可以附加可能标识「れる・られる」。根据上下文不同，有时可附加「ことができる」，有时不可。类型3无情无意志自动词本身包含可能的语义，因此可能标识「れる・られる」和「ことができる」两者均不可用。

其次，本研究通过对「入る」这类既可以成为意志动词又可以成为无意志动词的两用动词进行考察，得出结论。两用动词在作为意志动词使用时，后接可能标识「れる・られる」表示可能；在作为无意志动词使用时，只用自动词表示可能。

最后，对有对自他动词和自动词的可能进行探讨。有对自动词既可以通过自动词表示可能，也可以通过对应的他动词后接可能标识「れる・られる」来表示可能。通过分析，发现在使用自动词表示可能时，有自然、客观地表示可能的含义。而使用对应的他动词后接可能标识「れる・られる」来表示可能，则有一种对可能的实现具有强烈意志、愿望的语感。

在第七章（汉语可能表达方式）中，通过将汉语与日语可能表达方式进行对照，找出现代日语可能表达方式的特征，对日语教育提供有益参考。

本章通过对汉语和日语可能表达方式进行对照，发现汉语可能表达方式比日语要丰富得多。本研究将对汉语可能表达方式中的可能助动词可能表达方式与可能补语可能表达方式分别从构句和语义方面进行分析，寻找出两者的不同之处。

第八章（终章）对本研究的总结和提出今后的课题。

要 旨

ヴォイス（Voice、態）とは、事柄（動詞の表わす動作や状態）と参加者との関係を示す文法範疇のことである。言語学において以下の現象がヴォイスと見なされる、能動態、受動態、可能態、使役態などである。その中では、現代日本語の可能表現は非常に複雑である。その使い方は外国人の日本語学習者にとって習得の難しい内容の一つである。日本語教科書においては可能表現について説明が行われているが、可能表現の意味特徴や分類などは明示されていないため、学習者は可能表現に対する全体的な把握ができず、また母国語の干渉などによって誤用が多く出ているという状況が見られている。

本研究は八章に分けて考察を進める。

第一章（序章）においては本研究の目的を述べ、解決しようとする具体的な課題、研究の対象、研究方法、本研究の構成な

どを説明する。

第二章（現代日本語の可能表現に関する従来の研究）においては、可能表現の意味的特徴に関する従来の研究、「れる・られる」と「ことができる」に関する従来の研究、自動詞の可能に関する従来の研究をそれぞれ概観し、先行研究の成果を十分に取り入れ、より広い視野で、より全面的に本研究の内容を整合する。

第三章（可能表現の本質と定義）では、可能表現を「モノゴトの実現可能を表す表現」と定義し、可能表現の本質を分析し、可能表現が成立するために、必要な条件として、動作主の意図、条件制限、動作主の意図した状態変化という可能の本質の三要素が不可欠であるという考察結果が明らかになった。

それから、可能の本質三要素の考察結果を利用し、「認識の可能」、モダリティの可能、と一般に思われる可能表現との区別を考察する。考察を通じて、「認識の可能」とモダリティ可能は可能の本質三要素を満たさないため、一般に思われる可能表現との間に本質的な違いが存在するという結果が明らかになった。区別するために、「認識の可能」とモダリティ可能を一括して「可能性可能」と命名する。最後に、例文の分析を通じて、「得る」という形式はコンテキストや使い方によって、可能表現の意味用法もあれば、可能性表現の意味用法もあることが明らかになった。

第四章（可能表現の意味類型と形態）においては、先行研究を踏まえて、日本語の可能表現を分類する試みをし、現代日本

語の可能表現を全体的に把握しようとする。

まずは可能の意味用法によって意味類型を明らかにする。図 0-1 に示すように、現代日本語における可能表現は、アスペクトの側面から、「ポテンシャルな可能 (potential) (潜在可能)」と「アクチュアルな可能 (actual) (実現可能)」に二分される。それから、ポテンシャルな可能 (潜在可能) は、「能力可能」と「状況可能」に分けられる。なお、能力可能は、それぞれ動作主の能力可能、動作対象の属性可能、価値可能と三分類し、状況可能は、内的状況可能と外的状況可能と二分類する。

次に、可能表現の下位分類の意味用法を具体的に考察する。

ポテンシャルな可能 (潜在可能) は時間軸上に局在しない、状態的な意味の様相を帯びるという特徴を持っていると考えられる。潜在可能はある動作を行うことがなぜ可能・不可能であるのかという可能の理由を基準に、「能力可能」と「状況可能」に分けられる。また、能力可能は、それぞれ動作主の能力可能、動作対象の属性可能、価値可能と三分類する。動作主の能力可能はある動作または状態を実現する能力が動作主にあるか否かを表す表現である。本来備わった能力と習得した能力の二種類があると考えられる。動作対象の属性可能表現とは、動作を受ける事物 (無情物) に備わった特徴、性質、性能を表す表現である。事物の本来の性質に関わる属性可能表現と機械などの性能に関わる属性可能表現に分けられる。なお、価値可能は主体が対象物の可能性に対する主観的な評価である。状況可能は、ある動作または状態を成立させる動作主の能力が何らかの状況